

第 40 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2009 年 11 月 21 日～23 日（金沢大学）  
セッション討議内容の記録

セッション名：防災計画（3）	
日付：11月23日（月）曜日、セッション時間：10:45～12:15	
司会者名（所属）：及川康（群馬大学大学院）	
討議内容	<p>セッション全体：</p> <p>「中山間地域のリスク・コミュニケーション」が本セッションの各発表に共通するテーマである。いずれも以下のような共通の特徴を有する問題を対象としている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対象となる自然災害は「(地震や豪雨による)土砂災害」である。</li> <li>・ 高齢化が進み、若者が少ない。限界集落としての特徴を有する。</li> <li>・ ハード対策の劇的な進展は今後は期待しにくい。</li> <li>・ 地域住民の自助の活性化が重要。</li> <li>・ など</li> </ul> <p>以上のような問題に対して種々のアプローチが各発表者から紹介された。</p>
	<p>(326) 伊藤雅（和歌山工業高等専門学校）：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 四川地震と紀伊半島内陸部との共通点のひとつとして「文化遺産」の防災が挙げられた。</li> <li>・ 取組実施の担い手としての“行政”“研究者”“地域住民”についての議論が交わされた。防災 WS のゴールは何処なのか。研究者はずっと関わり続けるべきなのか。それとも、研究者の興味が薄れたら撤退していいのか。</li> </ul>
	<p>(327) 柿本滝治（熊本大学）：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ タイトルは「システム構築」とあるが、本質的には研究者と地域との関わり方に関する議論が主であった。</li> <li>・ 避難することで新たなリスクが生じる可能性について。</li> <li>・ 地域とどのようにして研究者はつきあっていくべきか。これについては前の発表での質疑とも関連することである。実態としては、対象地域住民の防災に関する意識状態を常に鑑みながら決定していくしかないとの見解。</li> </ul>
	<p>(328) 二神透（愛媛大学）：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援システムを研究者が構築したとき、それが地域住民にどのように受け容れられるのかを評価できる方法論を構築したい、というのが発表の主旨。</li> <li>・ 地域のリーダーや担当者が交代すると、システムへの評価、さらには防災全体の取組方針でさえ劇的に変わることがある。</li> <li>・ 何を測っているのかを明確にしておくべき。(ex：システムへの評価なのか、それとも研究者(当事者)への評価なのか、それとも研究者(当事者)が所属する組織への評価なのか)</li> </ul>